に在り手足に二中に在り頭に首を注中に文あるあり胴中より切断たるものあり爲に容貌變じ親子兄弟夫妻と雖ども見分る能はねば引取人なき分は男と女とを区別し何人埋めたりとの標柱を立てゝ警吏は之を埋めたるよし檜原村三ヶ字は人馬家屋とも悉皆埋没して殘るものなし埋没せし土塊の厚さ八丈乃至十丈も有りて迚も発掘すべき様なければ其儘棄置けり又破壊せしは大磐梯と峯山の間なる小磐梯にて此一山悉皆破裂せし由其近傍は未だ鳴動止まず烟は甘五六ヶ所より立騰る　又此に一大難件あり長瀬川水源は檜原又は吾妻岳より出る水落合て大川となるに三里餘も埋没し爲に目下は檜原近傍より二里餘の處水溢れ殊に依りては喜多方地方へ決水の程も圖り難しとて土木課員佐々木、大江、後藤の三屬測量中なるが右場所は一の湖水となりたる由猪苗代地方にては長瀬川の方へ決水すべしと心痛し河西の村々よりは山根の川桁村邊へ財産を運搬し立退たる模様あり實に戦地にも異ならざる有様ありと

●地下に在りし婦人　磐梯山の土石崩れ落ちたる西北の地方は馬の胴より切れたる屍又は人の首片足の切れとも言はず散在し實に目も當てられぬ惨状なるが此惨状中不思議にも一命を助かりたる婦人あり此人は年の頃廿四五ほど懐胎七ヶ月許りの者にて噴火の時土石の爲めに埋められしが幸ひにも二本の木の並立する間に挿まりたるを以てその兩木並立の間より空氣の流通を得て僅かに呼吸を通はせ居たるに翌十六日死体捜索の人夫が其邊を通りかゝり微かなる聲音にて地中に叫ぶものあるに心付て早速掘出したるところ即ち右の年若き婦人にて先づ命には別條なしといふ

●戦爭は盆踊り　會津人は維新の際の戦爭を此上なき恐ろしき事と記憶し最早斯ることは孫子末々の代までもなかれかしと考へ居たる程なるに今度の噴火事變に遇ひて一層の恐怖をなしこの變に比すれば會津の戦爭なんどは丸で盆踊り位ゐのものなりしと評し居る由其惨状推して知るべし

（右三件福島新聞）

磐梯山噴火の図（東京大学地震研究所提供）

明治二十一年七月十五日、磐梯山が爆発。山体が破裂し、噴出物総量は十二億立方メートルに達した。同月二十二日の東京朝日新聞をみると、磐梯山噴火による被害を、次のように報道している。

●最も酸鼻の處　磐梯山噴火に付て最とも喫驚酸鼻に堪ざるは同處岩瀬村の内長坂といふ所なり同處は磐梯山赤埴峯の麓にありて戸數二十八戸許りあり内潰れたる家は僅か一戸のみなれども死亡せしもの九十八人此他に養蚕農事等の爲に来れる雇人を合すれば百人以上に達すべく中に一家内殘らず死亡せしもの五戸他は何れも幾人かを殘したるも一人前の男とては八人のみなり次に川上温泉場は數丈の地下に埋られ却て小山の現出したれば同地の家屋住民は勿論浴客中五六十人は影も形ちもなく只屋根の葺草僅か斗りを見るのみ死屍は今日に至るまでに猪苗代の婦人一名を掘出したるのみ此他の地も數多の死人あり然し長坂の如く多人數に達せざるも家屋の潰れたるは却て甚し死体発見の節實檢するに首は木の股